

## ●沖縄

上地 隆裕

本県洋楽部門で特に注目を集めたのは声楽界である。中でも出色の出来栄えと言えたのは、実在する歴史物語を「県産オペラ」と銘打ち、県内外、ひいては全世界に発信しようという狙いで行われた「アオリヤエ」（琉球国王妃の名前）の連続公演であった。具体的に数字面で表すと、公演数18回、動員数の合計11,600人、公演地＝浦添市の「てだこHALL」のみ、役付出演者（主役は第七代琉球国王＝尚寧王＝を演じた田里直樹と、アオリヤエ姫役の宮城美幸）のギャランティは、地方都市では考えられぬほどの予算規模で上演を成功させている。

上述の公演に次いで注目されたのは、金井喜久子シンポジウムであった。金井は、本県（というより沖縄本島）から約3百キロ南方に位置する宮古島出身（1906年生れ）の作曲家である。東京音楽学校（現・東京藝大）の作曲科を卒業し、邦人女性作曲家初の交響曲（第一番）を初め、オペラや室内楽、舞台音楽（宝塚歌劇団公演）等、数多くの作品を世に送った人物である。年末（12月13日）に行われた同シンポジウムは、ミニコンサートを始め、所蔵資料、教育環境、作曲理論、作品分析、作品受容等の幅広い視点から彼女の生き様と国際的需要度（特にプロのヴァイオリニストによる英国に於ける金井作品の受容状況の実例報告は興味深いものであった）等、その功績を般化させる意味からも意義深い取り組みであった。

筆者も金井と同じ宮古島出身なので、かなり以前から彼女の実績については注目し、多少なりともその広報支援活動（例えば、ある音響設備の整ったサロンを会場にして、既出の田里直樹（テノール歌手）氏を定期的に起用し、聴衆を容れて彼女の作曲またはアレンジしたほぼ大半の歌曲を全てLiveでCDに録音、近在の学校に寄贈するなどした。

しかし、沖縄は特に民謡の隆盛地であり、そんな環境で「西洋音楽を般化させること」は並大抵ではない。常時そのような否定的状況と戦いながら、これからも西洋音楽という、演奏芸術を般化させていく覚悟が必須だ。

最後に、県内外の実演家による注目すべき公演を幾つか挙げておきたい。まずオーケストラから始めると、琉球交響楽団（RSO）は、音楽監督大友直人のリードで、定期その他のプロジェクトを完遂した。筆者が特に感銘を受けたのは、9月14日に行われた第52回目の定期公演で、最近は珍しいオール・チャイコフスキー・プログラム（ピアノ協

奏曲第1番＝独奏は福間洸太郎、悲愴交響曲）だった。

冷戦時代の沖縄では、ロシアや東独の楽団が何度もやって来て、定食のように演奏を繰り返していたプログラム・メニューである。大友のバトンは手慣れたプログラムを自在に振っているようで、そのタイトルとは異なって筆者には楽しく感じられた。

その他の大小のアンサンブルは、着実に定期公演シリーズをこなしており、中でもユース・オーケストラの取り組みの中にはジャズに挑戦するなどのユニークな団体もあった。

ソロの部門では、飛び抜けた企画や人材が見当たらず、例年になく低調と言えた。実績のある面々は別として、新しいパワーの持ち主が見当たらなかったのは残念である。

最後に、ユニークと言えばユニークな活動団体を紹介しよう。それは、今年で結成20年目を迎えた団員約30人余の「指笛王国おきなわ」と称する演奏団体である。演奏楽器は全員共通、手の指だけだ。既に定期演奏会も通算18回目を数え、出張公演、マスコミ出演の回数は数知れず、というパワフルな演奏団体だ。

他の演奏家グループと大きく異なるのは、団長が国王と呼ばれ、なんと王冠をかぶり、おまけに国王専用の衣装を身にまとっているところ。団員のユニフォームは、燕尾服ではなく、黄色のポロシャツ。沖縄を訪れる際は、是非同団（国）の定期公演または練習風景をご覧あれ、と申し上げておきたい。

## 上地隆裕（うえち・たかひろ）

沖縄県在住、1948年沖縄県宮古島市（旧城辺町）生まれ。琉球大学法文学部卒業後最初の渡米。通算五年の滞米生活を経験。最終学歴はメリーランド州立大学教育学部大学院修士課程（専攻は心理学・カウンセリング）修了。

帰国後、沖縄県人材育成財団の派遣により、ニューヨーク大学にて一年間研修。学業の傍ら、全米・全世界の各地の演奏団体、音楽院の取材を続ける一方、数百名の独奏家、指揮者らと対談、それらの内容を在京の月刊誌、その他の刊行物で発表した。

主な著書：「世界のオーケストラ」（四部作）（芸術現代社・刊）ほか多数